

【図書紹介】『ヘーゲル全集 第11巻 ハイデルベルク・エンツュクロペディー（一八一七）』責任編集・山口誠一 知泉書館 二〇一九年

著者	小井沼 広嗣
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	17
ページ	73-73
発行年	2021-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024424

【図書紹介】

『ヘーゲル全集 第11巻 ハイデルベルク・エンツュクロペディー（一八一七）』

責任編集・山口誠一 知泉書館 二〇一九年

小井沼 広嗣

ヘーゲルが論理学・自然哲学・精神哲学の三部門からなる哲学体系を築こうとしたことはよく知られているが、その体系の概要を記した書物が『哲学的諸学問のエンツュクロペディー要綱 (Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundsisse)』である。今回翻訳刊行されたのは一八一七年に出された初版であるが、ヘーゲルは生前、この書を二度ほど増補改訂しており、私たちの多くが手にしてきたのは最後に刊行された第三版（一八三〇年）である。

日本で広く普及している岩波文庫の『小論理学』や『精神哲学』もこの第三版に拠っている。一方、今回翻訳された初版のいわゆる『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』は、第三版の陰で、これまであまり顧みられてこなかった。本書が本邦初訳であるという点が、そのことを如実に示している。けれども、今後のヘーゲル研究の進展を見据える上では、本書はきわめて重要な書物である。というのも、ヘーゲル文献学の進展により、『エンツュクロペディー』の刊行をもって自らの哲学体系を完成したとするヘーゲル

理解はすでに過去のものになりつつあり、今では、死を迎えるまで自らの体系を編み直しつづけた哲学者としてヘーゲルは捉えられるようになっていくからである。

ところで、よく知られているように、ヘーゲルはこの書物を自身の講義の教科書として使用していたのだが、その際、ヘーゲルは自らが保有していた本の中に、講義に関連する膨大なメモを書き残している。今回の翻訳書の画期的な点のひとつは、精神哲学に関するものをはじめとする多数のメモも翻訳されていることである。これらのメモからは、講義に臨むヘーゲルの素顔を垣間見ることができるとともに、ヘーゲルの生き生きとした思索過程をも知ることができる。

特筆すべき二点目は、编者による詳細な解説が付されている点である。そこではヘーゲルの体系構想の変遷や、『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』が刊行されるに至った経緯、同書と第二版・第三版あるいは『論理学』との異同、各メモの文献学的考証などが、懇切丁寧に解説されており、読者はこれらを手引きとすることで、本書を読む際のポイントを掴むことができる。

ヘーゲル哲学を研究する上での枢要テキストを信頼できる日本語訳で読めるようになったことは大変喜ばしいことである。責任編集者として本書の刊行に尽力された山口誠一氏に心からの敬意を表したい。